

1923年 (大正12年) [19歳] 旧制水戸高等学校 1年生

「辰雄日誌 1923」No. 2 (2)

—— 1923年5月1～31日 ——

小池辰雄

○1923年5月1日 (火)

十六夜、晴。今晚の月を何と讃えよう。今晚の感謝と歓喜と希望は如何にみ空——澄みに澄んだ聖なる——に向かつて放たれたことよ。誠に「永遠より来たつて永遠に去った」この夜。偶然ではなかった。今日は、高島様の伯母様から御2回の御手紙を戴いた。それは普通の人の手紙ではなかった。文学はこの御手紙にあつた。生命がこの御手紙に溢れていた。基督の愛でなくて何であらう。

○1923年5月2日 (水)

晴。この頃の一つの大きな楽しみは書翰を書くことである。これによつて慰めの泉が与えられる。

神を信じ、エス様を信じ、これによつて生くる者でなければ、友をその人に見出すことは出来ない。

○1923年5月3日 (木)

晴。運動はこの月一杯、思う存分跳ね回ろう。来月になると暑いし、梅雨も来る。勉強もしなければならぬ。勿論今日といえども おろそかにす 忽ることをゆるさない。私は生まれてから未だ3、4ヶ月位しか経っていない。主の赤兒である。聖(霊)戦の開戦のラッパが鳴っている時である。御用はこれからである。

主の勇ましき僕はこんな身体では困る。貴き兄の犠牲、私はどうして人の如く歩むことが出来ようか。私の身体は神の器である。神の御試み、私の身に強く加わらんことを祈り奉る。私は彼等と戦わん。戦うものは私でない。私はその器である。

○1923年5月4日 (金)

快晴。“The May Sun sheds an Amber Light.” [5月の太陽はこはく色の光を放つ] は今日の天気であつた。その星の光、美わしき哉。これだけである。月は10時頃、静かに静かに昇ってきた。



○1923年5月5日(土)

午後から芳賀と自転車遠乗りをやった。小川に沿って駆った時の心地は何ともいえなかった。清水に頭を浸したときの清涼さもまた格別であった。1時間の遠乗りは随分よい運動であった。桐寮へ着いたときは、口がからからに乾いていた。そしてパイナップルの缶詰を切って、これにかぶりついたときの味は！ 今晚の静けさも昨夜の如く。

しかし、如何に静かでも、如何に気候がよくても、如何に食物がよくても、如何に身体の具合がよくても、私の心は今日は淋しかった。何の故であつたらう。神より遠かりしに非ずして何であつたらう。満足氣に実に愉快氣に、語り、歌い、笑い、している彼等と共に浸ってしまったとき、私は彼等と同じく迷うものである。彼等は芸術を口にする、文学を語る、哲学の語を口走らす、音楽を論ずる。しかし、彼等は何のためにこれらのことをなし、また何を求めているんだらう。彼等に誤解され、馬鹿にされるも何でもない。彼等の批評は空の空なるもの。我は神と共に歩まん。これのみである。

「嗚呼、神よ、悲惨の道は余が汝に到るの経路なりき」

の嘆を私にあらしめ給え。これは感謝の叫びである。飲みの最も深き叫びである。

「汝、世に対する時、橋上に立ちて足下に流水を瞰るの態度に出づべし。水をして

思うがままに流れしめよ。然れども之をして汝の身心に触れしむる勿れ」

之なり。神よ、我と共に在まし給え。

○1923年5月6日(日)

晴後雨。起床8時半。ローマ書第1章、第2章を読んで導き給うこと深かった。自転車で練兵場へ行つた。行人稀に、広野に唯一人、仰臥した時の心地。草の海の上、紺碧の空の下、雲雀の音楽を聞きながら、また之と相応じて讃美歌を唱いながら。そしてそのお祈りに答えて下さったその時の私は。私はこの辺の森林にお祈りの場所を見出した。農家は点在しているのみである。内村先生の言われた「祈祷の場所」を捜し得て何とも感謝と歎びに堪えないのであつた。

今日は、常陸鉾山との陸上競技の仕合があつた。勿論勝つたが、彼等の運動を重んずるのは結構なことと思つた。日本人には大学を卒業して事務に就く様になると運動を全然忘れてしまう人が多いとのこと。身体の保健上或いは娯樂の上からいつても戸外運動は実に欠くべからざるものである。西川君が遊びに来られた。桐寮へ2、3日泊まられるとのこと。夕方、讃美歌を唱うとき、人々の合わせて所々唱うのは私にとって実に辛い。人の居る所で唱うことは謹もう。生命ある、讃美の心を以て唱わなくて、どうして讃美歌を唱い得ようか。音楽のため、合唱の快を得んためには全然無いのである。

姉上様より御手紙を戴いた。彼女も未だ未だである。私も未だ未だである。

「元氣よく、まといつく災を変えて、余の道の杖とてもし給え。誠に君もいと小さき



人の一人なるも、主は君を君の努力の間、誘惑の裡に護り給う。主を仰ぎたたえ給え。主は助け給い恵み給う。かく思えばここに災は是君のために主の下し給うことを信じて、心強く雄々しくも堪え得るなれ。常に心を捧げまつり給え。救を求めつつ、我は神のもの、神の創造り給う所、との考を君の心の土台とし給え。かくの如き友、かくの如き土台、かくの如きよる可き樹蔭あるを思えば、煩わしきことの限りも、煩わしと思わざるに到らん。神、永えに君の心にいませ。」——フランス・ドウ・サレー

今日、兄上より賜りし主の深き聖旨、感謝して戴く。私は兄上のこれを何日、書かれしかを知らない。しかし今日、兄上も知らずして逝きし今日、私も知らずして迎えし今日、神より戴く。ああ、大能のお父様のみ、この事をなし給う。ただ主に従わんのみ。

この独逸語の独の字も知らない私がマルチン・ルターの、“Ein feste Burg ist unser Gott”〔神はわが固き城なり〕という独逸語の原詩を、内村先生の訳し導かれて読んだときの嬉しき。机上のルターから直接に話を聞いた様である。彼から聞いた今日の講演はたつた18行の文字より成るものであつたが(全体の半分)、神学の講義よりも、厳しかりそうな哲学の講義よりも、修身の百時間の授業よりも、はるかにはるかに偉大なる、力と生命に満ちたる深遠なる話であつた。それは莊重なる変調を以て響かなかつた。それは流麗なる美文ではなかつた。人の力はそこに少しも見得ない所の弱い弱い言であつた。人言に非ず、神の僕の言である。神より賜いし言である。無力のものの神を信ずる告白である。人の智はそこにない。神の智のみである。故に貴い。故に測り知れぬ。故に力ある、故に生命ある、故に強い。人が何と表したところでこの詩の滅びることは絶対にない。

神よ。私は孤独でございます。私は辛くあります。サタンの声は周囲に満ち満ちています。浮薄なる彼等に私をして染ましむることなからしめ給え。彼等に御聖旨を知らしめんとして、如何としても知らしめることは出来ません。根本のあやまてる彼等を如何に致したものでございましょうか。私の孤独の困しみは如何にしたら、癒されるでございましょうか。私の言は彼等に到底認められません。馬鹿にされます。彼等の言は一つ一つ私の心に合わないものでございます。私は全ての孤独でございます。しかし、こんな困しみは何でもございませぬ。神より離れたる時の私自身の心、それほどあわれな、悲しい淋しいものはございませぬ。私の食に対する慾によりて時々、胃を害しますときに、私は聖旨を忘れたることを思い、悲しみに堪えないことがございます。しかしそのときも、神なる父様が、来り給いまして、その罪を赦し給いますときの歓びは本当に感謝でございます。そしてその瞬間より私は強き力を得まして病は飛んでしまうのでございます。心の病の如何に身体に病に勝って悲しむべきものなるかを知らしめ給い、その度毎に主によりて生きんとする心を得しめ給います。感謝の限りでございます。

罪の贖主、エス様の御名により聞こしめし給わんことを祈り奉ります。アーメン。

“The more the difficulties are, the more the faith.”〔やういふ多くの困難は、やういふ多くの信仰〕



なる「クロムエル、書翰85」中の語をして、ますます深からしめんことを。我が経験によりて。感謝の安息日。

○1923年5月7日 (月)

グンデルト先生は熱心に教えられる。実につまらないだろう事も熱心に愉快気に教授される。小さな事に真面目に真剣になり得るのは非常に貴いことである。神は之を好み給う。我等は之によつて神の御心を見る。

高島様の伯母様から第3回目の御手紙を戴いた。まま様の御手紙によつて私は慰められ、励まされる。暖かき泉が之によつて注がれる。矢作義之君から葉書をもらった。彼は今日から修学旅行に行った。一昨日帰つて来たのかと思つてそのつもりで上げた御的が話は少々おかしかった。彼の旅行中、絶えず主の導き給うことを、また御恵みを垂れ給ひ、主によりて楽しい旅行の終らんことを祈り奉ります。彼は寸暇を利用して親切にも昨日の大手町の御言を報せてくれて、有難かつた。

「何ぞ知らん、人を悪評するは即ち自己を悪化する所以なるを。人を議するは即ち自己の議せらるる所以なるを。誠に次の安息日まで一日も他人の悪評を口にせず過ごせ、然らば新しき光明の胸中に照り渡るを感じるであらう」——モーセ十誡より——

これに励まされ教えられて、信仰薄きこの身を試して戴こう。

「我等を導き給う人、おわす。倒るる勿れと助け給う人、おわす。さらば我等はこの人を信じまつり、愛しつつ、讃えつつ、疑も野心の悲もすてさりて、毎日毎日歩まんのみ。

明日の事はこの人ぞ備え給う。」——R. Heber——

今日の兄上の御言と。

○1923年5月8日 (火)

雨後晴。ああ、北京の後に従いて堅く立たん。今日、附属の連中3、4人、所謂「ダベリ」に來た。たまにはダベルのもよい。しかし3時間余も、贅言ぜいげん或いはそれ以下の話々に費やすなんていうこと、神は果たして喜び給うか。私はこんな談話のおつきあいなることをするのは本当に辛い。時間の徒費も困ったことだが、サタンの款待は更に困った恐るべきことである。之を以て快となし、何も感ぜざる如き彼等は、悪魔の使ではないのかしら。

○1923年5月9日 (水)

晴。今日のフットボールはルールを知らない人々のよりあつまりだったので、頗る痛快であつた。久しぶりでやったので疲れた。そして足に蹴る力のないのに驚いた。

今日、母上様より御手紙を戴いた。近頃、御無沙汰勝ちであつたのはわかつた。山本の家が中野へうつたとの由。而も最も恵まれて。私は感謝であつた。純なる姉上に御恵



みの垂れんこと偏に祈り奉ります。高島のまま様がこのために切に祈って居て下さる。基督者の愛は何に依ってであるか。本当に彼女のために、彼女の子等のためにでなくて何であらう。私は親類の叔母にかかる方が、と思うことがある。

御恵に浴してより、如何に神より離れることありとも、真剣な心に帰って、お父様にすがらんとするときに、その縫らんとする心さえ与えて下さる神に対して、ただ感謝である。どうしても、神様の与えて下さった最も貴きもの、そして最も飲み給うものは、その信の心である。泣く心である。縫る心であると思われる。

神を離れて人智は何であるか。空の空なるもの、死の死なるものである。

「すべて主をよぶ者、誠をもて之を呼ぶ者に、主は近くましますなり」(詩篇 145・18)

「主よ何処に、と我は尋ねたり。主は聴きて凡ての怖れより救い給えり」(詩篇 34・4)

「千歳の岩よ、我が身を囲め。この世の迷想、悲しみも、憂いの種も、怖れさえ。照る日の前に、逃げまどつ、小雲の如く、散るなれば」——C. ウェスレー——

今日の声と、謹みて。

○1923年5月10日(木)

晴。一番先に寮の風呂に飛び込んだ。実に澄んでいて、気持がよかった。泳ぎの真似をした。これがこの3倍もあればと思った。

(桐蔭会の同輩、14人)桐水会を公会堂で開いた。6時には皆集まった。愉快的晩餐をとった。酒は勿論出ない。附属の会は之である。附属の気は、風は靄然として漲っていた。言うに言われぬ、心の一致があった、暖かみがあった、と思う。14人の心は団結していた。しかし之はやはり、尋常の満足のに過ぎぬものであった。彼等に、食前に祈祷するの心があったならば、彼等の語が感謝の語であったならば、彼等が神によりて結ばれたならば。という願いは、やはり最も難き願いであった。

桐寮で別れた。今日は静かな晩である。

○1923年5月11日(金)

雨後晴。兄上の声がする。僕に親しく語って下さる。この信仰の失せたる僕に。本当に有難い。神はやっぱり守って下さった。感謝の涙に咽ばんとす。

『宗教と現世』の中で、青き筆跡が。

「人に汲まれるれば汲まれるほど愛と好意と同情との清水を何の苦情もなく悦んで供給することが出来るようになります。神に頼らずして此の無慈悲なる世を渡ることは実に辛いことではありますが、然かし神を信じて之に対しますれば此の世は差程に辛いもの



ではありません。『基督信徒は全智全能なる神を信する紳士である』(The Christian is God Almighty's gentleman.) といつ言がありまするが、神を真誠に信するの結果が人に紳士的態度を供しすることは事実であります。彼は信仰により狡猾^{ずる}い性質を脱します。彼は人を疑わなくなります。人の悪を思わずして、善を信するようになります。彼は迫らない、憤らない人となります。煩雑を極むるこの社会に立つて平静の心を持ち続けることが出来るようになります。」

神を失いて失心せる私は兄上のこの言に接して蘇生の憶いがした。

Gentleman! Christian にして始めて本当の Gentleman たり得るのである。

兄上の信仰が行となって現われなくて、どうして之が今日、兄上の言として僕に響いて来よう。この言は空の言に非ず。行なき道德家の説教に非ず、兄上の信仰の行あつてこそ今日——ああ、彼の在らざる——今日、力ある、愛ある声として私の心に沁みこんだのである。

この弱き自分は、この孤独の境にあつては、日に少なくとも1時間は聖書と宗教書とを友とせざれば、消えなんとす。そして戴いた聖霊は之が宿って戴くためには、どうしても信仰の行である。神は智のある所に宿り給わない。行のある所に宿り給うのである。そして、毎日毎日、我が霊に塩ざれば、我が霊は俗化し行く。

ああ、私の戦は、外ではない、内である。己と人との戦でない。霊と肉との戦である。

○1923年5月12日(土)

聖霊を宿り給いて、私は元氣旺盛である、快活である。人言、我に於て何をか加えんである。友無くして少しも淋しからずである。無信の徒と交わつてまた愉快である。愛は彼等より少しも求めんとしない。彼等に基督的態度に出でて、彼等より毫も之を要求しない。そして私は愉快で居られる。感謝に一日を送り得、歓びに一日を送り得、希望に一日を送り得。この歓喜、感謝、希望は到底、基督者に非ずば味わえないものである。外部より受ける所謂快樂とは全然異なる。彼等より遙かに貴いものである。所謂楽しみを負う人々よ、それは夢と消え、泡と過ぎ行くものではないか。ああ、「今日もぼやぼやして過ごしてしまった」とか、「もう一ヶ月も経ったのか、何もなかった」とかいう言は、基督者の口からは出ないのである。

今日、三角の試験があつた。今まで習ったことは勉強して置いたのだが、問題の練習を全然やってなかったこと、数学的頭脳のなかったために3題出て1題も解決がつかずに1時間を過ごした。1題でも出来たらと思うが、別に否^{いや}な気持がしなかった。自分の貧弱な数学的頭脳のベストは尽くしたのであるから。人がカンニングを為ようと為まいと、自分は道によりて安しである。人が出来ようと出来まいと自分は自分の力によりて安しである。カンニングをする人はお気の毒な人、出来た人はしあわせと思うばかりである。



今日、兄上から御葉書を戴いた。5月10日に宇都宮で内村先生の「残るものと残らざるもの」の講演があつたとのこと。兄上、初めて先生の御講演を聞かれて、その熱烈なる血を沸かす様な御講演に感ぜられたとのこと。これを聞いて嬉しかった。と共に、内村先生の如何に伝道に御熱心なるかに敬服した。先生のあの忙しき御身体は、神のため、基督のためなるが故にかくも絶倫の精力に満つ。尚、幾年も幾年も先生の精力の続かんことを切に懇願し奉る。今晚の僕のお祈りは先生のために。

『静かに頭を垂れて』婢はお前に居ります、さて潔よく目をあげて『主よ、何の御用でございます』と伺いましょう。そのときに初めて天は開かれて、その光は私達の日々の仕事を輝かし、昨日は塵とも見えたものの皆、黄金の珠なるを明かします。大いなる御手は私達を助け日々の重荷を持つて下さいます。昨日はおそれた事を、今日は思わず『まあ容易い、まあ軽い』と微笑まずには居られません。『途にいるおそろしい獅子』も近寄って見れば繋がれているのでした。美しい宮への門はあいています。そして私達に、この信仰の弱くもゆらぐ私達にさえも、ここを治めよと、おさしずがあるのです。神に依れる人の悦ぶ御恵はこの私達の手で配られるのであります。——エリザベス・チャールス——

日々の仕事に感謝の声を捧げて。

○1923年5月13日(日)

晴。昨夜12時を報ずると共に私の仕事は手から離された。そして御手に抱かれて安らげく眠りについた。その感謝、その喜び。

今朝の空は瑠璃、琥珀と輝いている。私の気分は別である。空にも勝りて。聖き安息日の午前を静かに聖書と先生の書で過ごした。

「欣喜と感謝は基督教の基調である。信者の生涯を通して一貫する者は感謝である。善き事も悪しき事も感謝の種である。人生最大の感謝は神、我と偕に在まし給う事である。

『汝、神を有すまた何をか要せん』とあるが如し。』

とあるが如しである。

明暗より光明を望み得た今日はことに感謝であつた。

午後からは野や森の方へ散歩に行つた。「尼港殉難者之碑」、かの5月24日を憶い、ここに彼等の霊を弔つた。春の空は雲雀の声で鳴り響いていた。緑の芝は生き生きして、野一面にちらちらと陽光が爬っていた。人影が殆ど見えない。この美しき野と森に。我はそこで心ゆくまで讃美歌を唱い得て歓喜であつた。456番を唱つて兄上を呼び、彼の天にこれを聞き居るを信じて、何とも言えぬ力と喜びと希望に満たされた。内村先生の「復活と来世」が本当に自分の声、自分の希^{のぞ}みとなるときほど、感謝なときはない。今日、かくも導き給いましたこと、お恵でなくて何であらう。信仰の淨からんこと、信仰の正しからんことを



切に祈り奉る。偏したる基督となりたくございません。なま半かな不徹底な基督者となりたくございません。

……〔独文省略〕……

をこの野に見て、独逸語の“Fibel”〔入門書〕も生きたものとなった。高島様のまま様、喬様、母上様にお手紙を認めた^{したた}。

「如何にありとも愛する心はそれ自身恩恵^{めぐみ}なり、幸福なり。神の心、神の本体なればなり。従つてまた余の喜びなり。如何なる所、如何なる場合にありとも、善そのものなり。

君は御恵の中の御恵を知れりや。そは君の心に住みて君の心にすくう偏愛、我慾、ありとしあらゆる悪の種を亡ぼしつつある愛の神なり。温かき穏やかなるこの心を以て見れば、凡ての不足は消ゆるに非ずや。凡ての憂は除かるに非らずや。また人生は今や重荷ならずして来る日も来る日も平和を齋(もた)らし来り、会つもの悉く君の助となるに非ずや。」——□——

何と好い言ではないか。

兄上様よ感謝し奉る。私も強く立たん。北京のあとを慕いてぞ。

○1923年5月14日(月)

晴。神を求めて生きんのみ。山本の愛する姉上に葉書を差し上げる。

野にて摘みし菫、高島のまま様にも。〔菫の押し花の貼付あり〕

○1923年5月15日(火)

曇、やや寒し。近頃の一日は短い。健康な身体を載いて日を暮る嬉しさ。この身体を己れの慾よりして害せざらんことを祈る。夏は直ぐ来る。待つほどもなく来る。月日の流る速しと云わない。御恵は深しと云う。我は罪人なり、罪のかたまりなりと申し上げる。十字架におすがりするのみ。

神よ。私は辛くあります、彼等と共に居ることが。彼等の言、語調はあまりに軽薄でございます。傲慢でございます。生憎^{あいにく}でございます。

「我は高等学校生なり。我は一人前なり。我は大人なり。我は道理を知れり。我に批判眼あり。世のことよく解れり」

という語が彼等の言の裏にある様でございます。彼等に話しかけられて我は、神よ、何と答えてよいのでございましょう。一つ一つが反対なのでございます。または神の御聖言を発することは——之、神をけがす所以と知りまして——出来ないでございます。私、沈黙に居ればまた彼等を害します。私は彼等に如何に対すべきでありましょうか。

神よ、而して、私は感謝なり。御聖旨はどこまでも愛なるが故にであります。

神よ、和やかなる御言を授け給います。そしてこれは私に、私の中に私を慰めんために。



そして、彼等に、愚なり、心弱し、共に語るに足らずと思われれば思われるほど、神の私のために歎び給うを知り得まして、私はよろこんで御聖旨に従うのでございます。

○1923年5月16日(水)

曇、東南風、やや寒し。今日は父上の命日である。親といえば母上より思い出せない様な私は父の命日といっても差程の感響を覚えない。長じて父を失いしより、幼き時に失つて返つて幸であつたかも知れない。

小説! 小説を読む人々、我が友達よ、君達は小説を読んで何を求める。君達は云う、誰のはどうだ、どこが好い……、と色々な批評をする。小説のために多時を費やして、精神を費やして何とも思わぬ。読み終つて嘆ずることは、吐く言は大抵、定まつている。殊にこの頃は、小説が実によく流行る様である。日本のこの頃の小説に何がある。内容は何であるか。私は鋭く言わざるを得ぬ。空なり、腐れり、柔弱なり、実に空なり。彼等は小説によつて精神が害せられつつあることを知らぬ。思想がオツチョコチョイになりつつあるを知らぬ。むしろこの害を利と見て、害を智と見て、口に上せる。その軽薄さよ。あわれむべき人よ、君達もまた凡人と共に小説を読んで夢みるかこの青年時代を。再び来らざるこの青年時代を。

貴き、感謝なる一日をでも送つたことがありますか。君達は言うであろう。始終堅い本なんか読んで居られるものかと。小説でも読んで心を慰めんと。誠に学校の書は無味かも知れぬ。しかし小説以外に君達の読むべき書は多くある。それを知らぬか。勿論、小説といつても中には好いのはある。しかし残念ながら我が国の著作の中にはあまりない様である。殆どない様である。

さて、私、学校でやつている「中古物語」なる書。甚だ好まぬ。古語を学ぶにはそれはよいかも知れぬ。学校の目的の半は之にあるかも知れぬが。その軟文学なるが故に好まぬ。死せる、腐れる文学と私は云う。人は何と云おうとも。その表わす所は下へ下へと沈み行く調である。暗黒へ暗黒へ、失望へ失望へである。希望の光がどこにあるか。日本の文学はかかるが故に死んでいる。源氏物語を読んだことはない。ちよつと見たことはある。字句は解らない。文の美は知らぬ。大学者が何と云うとも私の欲する文学と云うことは出来ぬ。宇宙を善と見、光明と見ざる間は、希望をこれに見ざる間は、歡喜を之に見ざる間は、日本の文学は永遠に死である。

この間、母上様から戴いた御手紙に、亡き兄上と語りし夢、それから続いて、僕と語りし夢を見られたとあつた。それは信仰上の物語であつたと。そして母上は神にこの嬉しい夢のために感謝の祈りを捧げられたと。何と有難きことだろう。何と喜ばしいことであろう。そしてまた、高島様のまま様からの御手紙は、まま様が兄上と夢の中にて物語られ、僕のために共に語つて喜ばれた、とあつた。何たる感謝のことであろう。御恵や実に大である。



兄上、御許に召されし兄上は本当に僕のために、この僕を見て感謝して居られるのである。それは僕自身も確信できる。否、確信を戴いたのである。直接に。

そして兄上は守っていて下さる。兄上の肉体はなくとも、肉体より発する声はなくとも、兄上に申し上げる言の、彼に聞こえ、彼が喜んで下さることの確信を得させて戴くその喜びは他にあるうか。こんな嬉しいことが外にあるうか。

私が兄上の夢を見ることは屢々であるが、その時はいつも快活な、澆刺^{はつらつ}たる、歡喜に満ちた兄上とたのしく遊ぶ夢である。夢の中でこれほど愉快な夢はない。否、起きている時でもこんな感じはなかなか得られない。

兄上は生前、同心町の家に居たときに、午前9時になると、祈りのために二階の縁側に生まれ、雨戸を一枚排して、独り静かに祈られた。丁度9時である。僕が偕に枕を並べて居て、9時に共に居るときに、兄上が祈りのためにかくせられないことは一度もなかった。

私は今は就寝の前に、天氣の悪いときは廊下つづきの便所との間の所でお祈りし、天氣のよいときは庭にでてお祈りをする。昔の兄の気分もまたかくやと思われて嬉しくなる。

この頃、彼等と共に居て、切に感じることは彼等がよく、人の批評をなすことである。批評よりも寧ろ欠点をあばく悪口である。或いは冗談に言う場合もあるかも知れぬ。しかしこれは確かに宜しくないことである。悪癖である。今までそこに居た人も、彼がその場を去ると、やがてその人の批評が始まる。欠点あばきが始まる。何たる卑劣ぞ、卑怯ぞ、女々しきことぞ。そして、笑って嘲笑をして以て快たるが如くである。彼等の習はやや性となっている様である。独逸語の Fibel (入門書) にあつた句を知らないか。何と思つてこれを読んだのか。唯字句の意義を知つて、それつきりか。それではなさない。学問はそんなためか。彼等に言つてやりたい。

……〔独文省略〕……

5月7日に自分が試みんとしたことは今日、真面目に考えて本当に神の歡び給うことなるを報せて戴いた。

人々よ、それは (批評、悪口) 果たしてあなたがたの謙^{へりくだ}つているときの声でしょうか。

も一つ好い文章があつた。

Sprich nie etwas Böses von einem Menschen, wenn du es nicht gewiss……〔独文省略〕

……

私は近頃、定めたことがある。これは欠くべからざる大切なことである。これは飲んで遵^もり得ることであるが故に定めた。少なくともこれだけは。

起床 午前7時

就寝 午後10時半 (睡眠時間8時半)

宗教書 1時間

独逸語 1時間30分



英語

30分

書翰・日記 1時間

今日は愉快に運動して来た。フットボールは実に好い運動である。30分やると、ヘトヘトになる。彼等の最も美なるときは彼等の運動に何も忘れて熱中しているときである。その活発な男性的な精神がよい。彼等の最も醜なるときは、室内にいたらただ話をしているときである。今日はお腹が空いた。兄から、積極的に運動しろと云って来た様に積極的に運動しよう。それは確かによいことである。なまぬるは一番禁物。また、なまぬると云うと彼等の小説を思う。

今日、また思ったことがある。それは他人の葉書を読むことである。実に悪いことである。桐寮には郵便箱が別にないたため、ただ放り込んで行く。それをちよつと読んでしまう。そして渡す。実に不作法である。今日約4時間程もダベツテ行つた友達が4人居た。人の妨げを全然思っていない。僕は今日、このために少なからず妨げられた。ダベルのは1時間を限度としてもらいたい。彼等の無思慮にはあきれる。そして言うことは例の如く、人物評、悪口などのくだらぬことのみ。自分は厭でたまらない。実際、「彼」はと云う友達が居ない。彼等が大学を出て社会に立つ。その日本は。水戸高等学校生、我が敵なる汝等よ、如何に騒ぐとも私は机上のルーテルと共に立ちて動かし。

Ein feste Burg ist unser Gott, [我の神は堅き城なり]

Ein gute Wehr und Waffen, 攻防自在の武器なるぞ。

Er hilft uns freiaus aller Not, 今や我らは苦難なやみに遭えど、

Die uns jetzt hat betroffen. 神は一切の助けなり。]

○1923年5月17日(木)

晴。独逸語が段々面倒になって来た。数学は解らなくて困る。もう5月も半過ぎである。夏がすぐ来る。6月1ヶ月経てば夏休み。総てが歓びである。独逸語、数学も体操(兵式)も、私が普通の考えに在らざるときは総て気持よくできる。出来ても出来なくても。しかし何といつても浅学だけはいい気持がしない。独逸語は第一番の重要課目、そして語学は元来好きであるから、難しいだけ、やる気が出て来る。

来れ来れ、独逸語、皆、汝を噛みこなさん。

近日中に1年の蹴球対級仕合がある。去年は奮闘優勝した実にあのときは愉快だった。身体はヘトヘトになったが、優勝したときの愉快さは実に素敵だった。僕が選手となつて仕合に臨んだというのはこれが初めてであった。今年は去年の様に上手な奴が居ないので、苦戦であろう。恐らく初陣の花と散るであろうが、自分はベストを尽くそう。級のために、よし負けるとも。男らしく。



○1923年5月18日(金)

晴。ルーテルはその父を、私は私の母上を、

「私に教育を授けるために貧窮の内にお母さんがどれ程苦勞されたか、実に私の生まれてから今日までお母さんのお陰は甚大であつた」

という。御聖旨ならば、僕にルーテルの如き心と身とを与え給わんことを。

日常、御聖旨をよく伺つて歩んで行きましょう。もし御聖旨に違う様なときには、神は私にルーテルの心と身を与えんとし給わざるはおろか、虚弱、薄志のものとなし給うであらう。僕は、ただただ神に従い基督を仰ぎ奉らんことのみに生きたいのでございます。

然るに今日、御聖旨にたがいしこと多かりしを思い、本当にこの罪にけがれたる身体、悲しくございます。

主よ、主はこの多くの多くの私の罪を既に贖つて下さいました。本当に感謝でございます。主よ、主におすがりすることのみによりて、私を正しくなし給え。アーメン。

○1923年5月19日(土)

曇。午前、降りそうで一寸心配したが、私の心に非常な望と祈があつた。やはり降らせ給わなかつた。私は喜んで停車場へ行くことが出来た。停車場まで行つたら相当へばつた。随分蒸す様に暑かつた。車中、半分位(全程の)は上衣をぬぎ、窓をあけていなければ暑くてたまらなかつた。つまり友人達が来て話す様なことがなかつたので、また楽しい時を送り得て嬉しかつた。東京は相変わらず人と塵の町であつた。家へ急いだ。宅へ着いたのは4時半をまわつていた。母上が、姉上が、喜べる笑を湛えて出て来られた。我がホーム、暖かきを感じた。楽しい晚餐を戴いた。美味しいお菓子もあつた。長崎かすてらにはからずも会つた。東京へかえつて来ると過食をする傾向がある。否、水戸でも大差はないかも知れぬ。自分が若し食物に吞まれ、食われる様なことがあるならば、誠に悲しむべきことである。吉原の叔母様が来られた。僕に会いに、また兄上に会いに。泊まれた。叔母様は家へ来られると一番くつろがれる様である。母上に尽くるところを知らざる如く愉快に話される。10時、やや疲れているので先に失礼して眠つた。兄上(宇)は12時近くに帰つて来られた。

○1923年5月20日(日)

晴。待つた日が来た。待つた午前が来た。大手町へ！ 僕の心はただ之だけであつた。大手町へ着いたのは9時半。前から5列目、左から(中央から)4人目が与えられた席であつた。今日も実に見事な木や花が飾られてあつた。花は一層、堂内の氣を潔くしてくれる様であつた。やがて掲げられた。そして右の板に掲げられた紙に、

基督伝研究(第27回)



「黄金律」

マタイ伝第7章7節～12節

ルカ伝第6章31節、第11章5節～13節

讚美歌45、81、446(婦人)、223

黄金律、

「是故に凡て人に為られんと欲うことは汝等も亦その如くせよ」

と。去りにし兄上の聖書に懐かしき、そして不滅のブルー・ラインが!! 我が眼は潤う。
我が心は聖霊によりて。

そして午前10時は来た。 讚美歌45を歌った後で、詩篇第145篇の朗読、祈祷がある。
ダビデ讚美の歌。

「²われ日ごとに汝をほめ世々かぎりなく聖名をほめたたへん。……⁴この代
はかの代にむかひてなんぢの事跡をほめたたへ なんぢの大能のはたらきを宣
つたへん。……⁸エホバは恵ふかく憐憫みち また怒りたまふことおそく憐憫
おほいなり。⁹エホバはよろづの者にめぐみありそのふかき憐憫はみわざの
上にあまねし。¹⁰エホバよ汝のすべての事跡はなんぢに感謝し なんぢの聖徒
はなんぢをほめん」(詩篇145・2～10)〔英文〕

及び、ペテロ前書3・8～18についての畔上先生の御講演。有難き御導きの声であつた。
ペテロ前書3章、

「¹³汝等もし善に熱心ならば、誰か汝らを害はん。¹⁴たとひ義のために苦しめ
らるる事ありとも、汝ら幸福なり『彼等の威嚇を懼るな、また心を騒がすな』
¹⁵心の中にキリストを主と崇めよ、また汝らの衷にある望の理由を問ふ人に
は、柔和と畏懼とをもて常に辯明すべき準備をなせ」

ルーテルが言つたことに、

「神に対する信徒は、信仰の信徒と善行の信徒とである」

とこの両者あつて神に対する本当の信徒であると。誠によき教えである。

ホイットマンが言つたことに、

「男児が為さんとして立つたときには必ずその道の勇者となり得るものである」

と。畔上先生は私達を励まして、

「我々もまた確く立つときには必ず信仰の勇者となり得るのであります」

と。何と力強き、欲ばしき言ではなかつたか。私は思わず血が沸くのであつた。なまぬる
は禁物、私もまた偽善なる基督者となりたくない。なまぬるの基督者になんかならぬが勝
れりである。神は熱心なる者を歓び給う。私はどうしても、世のなまぬるき氣を脱し、世
の誘惑に勝つて、敢然として立たねば生きて行かれぬものとならねばならぬ。

それはただ、基督の僕となるより外に一つの道もない。



ある人が disappointment (失望) の語を見て言うに、

之、disappointment に非ず。d を h に換えて見よ。然らば何を得ん。His appointment His appointment ではないか。disappointment を His appointment として見れば、失望は決して失望に終らずして「彼の命令、任命」である。即ち、苦しみは失望することに非ずして、彼の命令である故に、安き心を以て苦しみを受けうるなりと。

何たる面白きことぞ。事実、誠に然りである。基督者に永久の失望はない筈である。失望とは、彼の任命して置き給う所の苦しみなのである。

黄金律、

「是故に凡て人に為^せられんと欲うことは汝等も亦その如くせよ」

「さらば凡て人に為^せられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法

なり、預言者なり。」(マタイ7・12) [英文]

「なんぢら人に為^せられんと思ふごとく、人にも然せよ。」(ルカ6・31) [英文]

誠に我が国人の消極的な「事勿れ」主義的な性質はよく、「欲せざる所之を人になす勿れ」の東洋の教えがあわれむべきを知った。日本人はよく云う「人に迷惑をかけぬ様に」と。かく言うと、「人のためになることを進んでなせ」と云うのとそこに霄壤^{しょうじょう}の差がある。先生の言は針をつく様に私達に感じた。「人の行かざる所に行け」、「人の為さざることを為せ」と或る偉い女学校の先生が言われた(アフリカの)。内村先生の書でいつか。

かかる人が日本に起こらざる間は、日本は永久に救われない。誠に然りであるとお答えするのであった。

「日清戦争講和談判のあった下関に、かの時に『支那人の大学を建築』したら、今

は日本と支那とは如何なる間柄で居るだろうか」

と叫ばれたときに、私は先生に同情措く能わざる者があった。先生の眼底には、言われぬ涙がこもっていた。若し彼の時、かしこに支那人のための大学が立てられたならば本当に今の日支間はどうなであらう。今日のそれと相反するものではないかと。先生と共に私達聴者が思ったときに涙であった。

基督者をあやまり見る国民は何だ。基督者に優る愛国の士は居るか。基督者の心は大にして深きが故に、清きが故に、小利害をのみ見る多くの国民にはそれが解らないと見える。

当時、先生が、この考えを(大学建築)有して居られたとは。ああ偉なる哉、先生。先生は当時の諸大臣の遠く及ばざるところであつた。また先生は今日の諸大臣に勝ること幾層倍である。彼等の頭は、肝腎な肝腎なものに空である。他は備わるとも。この故に永久に大政治が行われない。決然たる断行が湧いて来ない。先生の偉は何であるか。実に誠に基督に依る偉である。ただ之だけである。故に何者もこれに勝ち得ない。

私の弱くなり行く信仰は今日、新しき生命を注がれて復活するのであった。本当に感謝の午前であつた。大手町を去るのは惜しくあつた。



神に感謝す、神に感謝す。1923年に戴いたこの御恵は永久に私のものたらんことを祈り奉る。讃美歌81(現139)

うつりゆく世にも かわらでたてる

主の十字架にこそ われはほこらめ

わざわざいさいわい よしあしともに

ただ十字架にこそ きよくせらるれ

この木曜に今井館でクロムエルの信仰、清教徒(Puritan)の信仰についてのお話がある由。僕が東京に居るなら、と思った。

先生の信仰。自分の信仰が之に導かれること最も欲ばしきことである様である。先生の信仰は、真以て得られない。本当に自分から、自分で苦しんで求めて先生の信仰に一致して初めて得られる本当の真剣な貴き信仰である。神より直接に戴く信仰である。先生は勿論、私を知り給わない。而して、自分は先生に導かれ、先生を慕う。そして私を知らざる先生と靈交をなす。その交の出来る時の貴き。こんな潔き交は無い様である。現に私淑するはこの両先生のみか。

佐伯様のお家へ、兄の遺稿を戴きに行つた。久しぶりで西片町へ行つて昔の家を見、昔よく通つた坂を通り、しいの木を見たときは、言うに言われぬ懐かしみを覚えた。腎臓病院、亡き兄上に負^おぶさつて行つた。理髪店のことも思われてその跡が偲ばれた。また、内村さん、投手の一高黄金時代によくこの坂を通つて、同心町からその練習を見に行つたことが思い出されて、兄上と僕との足跡を捜したくなるのであつた。坂に、言われぬ暖かみがあつた。遺稿を見て驚き且つ兄上の絶倫に敬服した。天性精力家ではあつたが、あの多忙多事の大蔵省財務官当時によくあんな翻訳が出来たと本当に驚くと共に、大いにそのペンの跡に励まされて、我も立たん、我も従わん、我も為さん、と思つた。現在のこの己れが兄上の弟かと思つたときに、兄上に対して慙愧に堪えないのであつた。

汝の道は真剣の道也、との声を聞く。

兄上は何故、かくも速やかに逝きしと時々思う。

歓びの声がする。兄上は、主の呼び給うところとなりて速やかに。

悲痛の声がする。兄上は、我がために。

「兄上、我が為に」と聞いて、僕は悲しみに身も崩れんばかり。

而して悲痛の中より凜然として僕は立つのである。

汝の道は真剣の道なり、と云う。

神よ、守り給え。

午後から待ちに待つた中野へ行つて夕方までの楽しき散歩をした。市ヶ谷見付から甲武線に乗つた。千駄ヶ谷を通つた。矢作義之君の家へも寄りたかつたが残念にも時間がゆるさなかつた。中野！ 中野！ 久しぶりの中野！ 降りました。中学1、2年の頃、亡兄につれ

られて散歩に来たことがある。そのみが偲ばれた。故に懐かしかった。姉上の家まで5、6丁〔5、600メートル〕あった。家のまわりは田畠と林である。小川の流れがある。原がある。蓮華の赤い花が咲いていた。義雄さん、隆さん、富美ちゃん等を育てるには本当によい所である。好適の地である。家は二面が竹藪と林に囲まれている。しかし、日あたりはよい。もう蚊帳を釣っているとのことには驚いた。大きなガマガエルが居て、之が義坊、隆坊をその、きかぬときに嚇すものであるようだ。

「そんなことをするとガマガエルが来るよ」

と云う。富美ちゃんは大きくなった。歩くのもよほどしつかりして来た。ちよこちよこかける。本当に可愛らしい。僕を忘れないで、憶えていてくれ。よく遊んでくれた。その喜ぶところなどの純なること、単なること、愛なること。彼の女ならではの。

義雄さん、隆さんをお湯につれて行つた。喜び勇んで家を出るときから嬉々として母の許に帰るときまで、本当に可愛かった。従順であつた。子供らしくあつた。彼等に、真に愛する情を以て対するとき、彼等は真になついでくれ、喜んでくれ、遊んでくれる。その単にして純なる心は実に貴いものである。往々にして彼等の純情に教えられるのである。

天然の兒、その貴きこと、人長ずるに従いこの天賦の貴きものを失つて、小智へ小智へと走り、技巧へ技巧へ、詐りへ詐りへと走る。これ、神に叛くことに非ずして何ぞ。隆さんは富美ちゃんに何を運びしか。彼、人の作れる文明の玩具に非ず、天然の笹の葉を運びきたれるに非ずや。富美ちゃんはまた、その一つを取つて之を母上に捧ぐ。

嗚呼、自然の兒。汝等は神の御手になれる木の葉を愛して之と遊ぶ。潔き哉。彼等の母なる姉上よ、願わくは彼等を純なる兒達に育せられよ。姉上の仕事は、大臣の仕事より大なり。神の子を育てる姉上の仕事は、その隠れたるが故に更に貴し。義雄さん、隆さんを雄々しき純なる兒に。富美ちゃんを美わしき性の女の兒に。願わくは。

僕が汗を流して姉上のお家へついたときに、姉上は何をして下さいましたか。姉上は井戸側で僕の頭に水をかけて下さったのではありませんか。その清冽なる水を頭に浴びたときの心地好き。その水に姉上の純なる愛がこもっていなかったろうか。これが最上の御馳走であつた。これに勝る御馳走はなかつたのである。

お家をその夕に去るのは名残惜しかつたが止むを得なかつた。帰途、かの原でレンゲ草を一束摘んで家に戻り、兄上の写真の前に、兄上の花瓶に挿して、僕の心を兄上に掬んで戴いた。

昔を偲ぶレンゲの花は今日、僕の手から兄上に。

今夜は母と兄と姉と皆で揃つて楽しき夜を過ごした。昼には吉原の叔母様が西洋料理の御馳走をして下さった。僕に聞かれたから、僕は西洋料理と答えた。美味しく戴いた。叔母様は家のために喜んで下さる。今日は本当に感謝の日であつた。

○1923年5月21日 (月)

雨。午前、細雨の中を武田のお家へ行つた。武田の叔母様は変わらざる愛の心を以て僕を迎えて下さった。そのネーブル(カリフォルニアの)はこのために更に美味しく戴いた。人參幾那鉄葡萄酒は、かかる故に更に効力あることであろう。

午後からは斎藤様の祖母様(力様のご母堂)が逝去せられてその告別式があるので、それに列ならせて戴いた。肴町の光源寺で行われた。外の雨と共に私の眼も潤った。79才の高齡で逝かれたのであった。死について思わせられざるには居られなかった。

母上を少しでも長い間、お慰め致さんと思い、5時50分の汽車で帰るのを止めて、7時50分のにした。車中は相変わらず独りであった。

上京すると、自分は御導きに与ること誠に大なるを感じる。自分の弱きと罪とを教えられて、ますます主なる神におすがりせざるを得ざるに至る。この度の上京も感謝のみであった。感謝すべき事、多くあつたが、一々載せるわけにいかない。これで筆を擱く。

○1923年5月22日 (火)

半晴。僕の身体は之を本当の健康体にする必要のあるを十分に知らせて戴き、本当に身体のために一生懸命になることを最大の務めと感じた。規則正しい生活がその最重要条件である。神の告げ給うところは之である。堅く立てよ、と言われる。我が命ずる時を守れと言ひ給う。我が命ずる食を食えと言ひ給う。22日! 何を私に語るか。

○1923年5月23日 (水)

半晴。ルーテルと董が机上に。母上と兄上と両姉上と、高島様のまま様と、かよこ様と義之ちゃんとのために祈り奉る。そしてまた、大切なこの身のために。

○1923年5月24日 (木)

自転車をも30分駆り、フットボールをも30分やったら、足がへとへとになった。お湯に入つてよい気持ちだった。夕飯は美味しかった。叔母様から戴いた人參幾那鉄葡萄酒を呑んだ。苦味はあるが、僕の身体を思つて下さる叔母様を思うときに有難く戴けた。

主は宣ひ給う、私の心と身とのために。

「汝は今、忍ぶべきのときなり。故に雄々しく忍べよ。後、必ず汝に光と歆びと臨まん」

何と感謝なる御言ではないか。私は本当にこれを信じて、神によりて心安しである。

今晚は、柏木の今井館でクロムエルの信仰について内村先生とその人々が楽しく語つて居られることであろう。先生のこのお話がここで、うかがえれば。



○1923年5月25日(金)

晴。今日、数日来初めて少し春らしい天気になった。人が如何にこせついで勉強するとも、ずるいことをたくらむとも、我に於て何かあらん。我が敵は彼等に非ず。我が敵は、我が心の彼等のなすことに関わるるとき、そのときの我が心、それが敵なり。

「信者より見たる不信者」(「感想十年」より)〔註…内村鑑三全集第14巻208頁〕

「不信者より見て信者の如き奇異なるものはあらざるべし、然れども信者より見て亦不信者の如き奇異なるものはあらざるなり、百年に足らざる生涯を存在の全期と見做し、金力は能力なりと信じ、位階勲章を実質的栄誉なりとして喜び、聖書を浅薄なる書なりと嘲けり、成功は楽に面白く生涯を送ることなりと信ず、如何なる現象か之に優りて奇異なる者あらんや、我等は不信者の生涯の余りに兒戲の類するを見て、時に或は抱腹絶倒して哄笑を發せざるを得ず。」

かつて兄上が之にブルーラインを添えたるときと正しく同感を以て今日、之を読む。

今晚は数日来で、星を仰いで嬉しかった。

……〔英文省略〕……

書翰と日記に少なからざる時間を費やされるが、之が心の大切な非常な慰安である故にどうしても止めるわけに行かない。

母上に手紙を差し上げることが、僕の務めの中で最も潔き、楽しきものであるかも知れぬ。人々の現世的、肉体的、浅薄な声は相変わらず聞こえる。自分は心の友を有せざる孤独な者であるが、自ら友を求めんとしない。高等学校生の基督者を、彼は如何、彼は如何、と求め歩くは愚の骨頂、卑劣者のすること。友を求めるより先に、やる事が多くある。自身自身の心にある。〔写真立て(ルーテル)と花瓶の菫のスケッチあり〕

○1923年5月26日(土)

晴。イエス・キリストの画像が柱に懸けてある。畏ろしきこと哉。友よ、その像を下ろせ、速やかに下ろせよ。汝、偽善なるものよ。汝の日々の生涯は何によりてなし居るか。芸術と云い、文学と云い、哲学と云う。而して汝の言は空なる、虚なる言辞のみ。批評のみ、悪口のみ。旧き誇り、称賛のみ。汝の心に感謝の念起こりしことありき、汝の心に眞の歡喜起こりしことありき。神の御言を聞きて平伏ししことありや。

汝は時に讃美歌を唱う。そしてこれを何と云う、「くだらね」と云うのではないか。それが讃美歌か。神と聞けば、迷信位にししか思っていない汝。何故に、基督の画像を柱に掲ぐるや。偽善、無思慮の徒よ、速やかに卸せ。我が心、怒りに燃えたちて、將に怒りの言を發せんとす。

然れども我を抑うるものあり。我も彼と共に涙を吞んで忍ばん。汝、我が心を知らざるか。汝の我を知る時は何時なるや。汝の彼を知るときは何時なりや。汝の涙を流すときは何時



ならん。汝のために、ただその時をのみぞ待つ。

基督者に言うべからざる苦しみあり。主のために、と知って、我苦しからず。我忍ぶ。

「負けて人格は昇り、信仰は進む。人に負けるのは神に勝つのである。忍んで人に負ける時に神の慈恵の門戸は開かる。我等は人に撃たれて神の懐に入るべきである。」

「然れども主は永く我等を愛する山に留め給わず。我等を世に送って我等の受けし恩恵を世に頒たしむ。その時我等に苦痛あり、心労あり、我等は主に命ぜられて止むを得ず世と交わるなり。自ら好んで交際を求むるにあらず」——「感想十年」——

この不信の国に於て作文を書くとき、我が切なる思いをそのまま書きあらわし得ざる困しき。我は今日、神に対して偽文を作りたり。我が最も言わんとせし所は言い得ざりき。我、ルーテルを机上に置くこと誠に辛し。彼等不信の徒に対して言われざる辛さを有つ。

主よ、誠に感謝し奉ります。私の日々は、聖書を繙くこと、宗教の書(主のために書かれたる書)を読むこと、讃美歌を唱うこと無くしては、一日たりとも過ごし能わざるに至りしことを。

主よ、願わくは、この感謝の心を永久に我がものとなし給え。与え給え。ああ、召されし兄上は我と共にあり。この歎びよ、去ること勿れ。

「何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を着んと身体のことを思い煩うな」(マタイ6・25、改訳)

○1923年5月27日(日)

雨曇。疲れて居たので今朝は起床がおそかった。細雨が音もなく降っていた。日曜、安息日なるが故に、僕の心は晴々しかった。午前には相変わらず聖書と先生の書に依つて。「新約聖書の Ring (指輪) の宝石なるローマ書」を読んだ。基督再臨問題講演集中の、基督の再臨と復活は本当に僕に希望を燃え立たせる教えであった。

「再臨ありて信者の復活あり、復活ありて愛する者の再会がある。パウロ、ペテロ、ヨハネ、アウグスチン、ルーテル、クロムエル等に(——僕の兄上に——)また嘗て共に祈りし多くの兄弟姉妹等は面と面とを相合わせて遇う事を得るその日の歓喜平安感謝は果たして如何ばかりである乎」

誠に、誠に！ またその一節に、

「最後にパウロは復活及び再臨の信仰とこの世に於ける事業との間の深き関係について一言した。曰く『されば愛する兄弟よ、確くして動くことなく常に励みて主の事を務めよ。汝等その労の主にありて空しからざるを知ればなり』と。再来なく復活なくんばこの世に於ける事業伝道みな無効である。然れども復活ありて失敗を憂えず、無限の忍耐と待望とを抱き得るのである」

と。故に我々信徒は勇みて雄々しく歓喜に満ちて立つ。

今日、万年筆で書く。これは兄上のお形見である。愛する兄上の右の手はこれを執って、



この心をこのペンに依って表わした。信仰の心はこのペンを通過して紙上にあらわれた。その清きペン。僕は、このペンの心を讀むことを願う。

Easter '21

Likewise the Spirit also helpeth our infirmities :

For we know not what we should pray for us we ought :

But the Spirit itself maketh intercession for us

With groaning which cannot be uttered.

—— Romans, VIII.26 ——

「²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。」(ロマ8・26)

これは聖書の中に、白き布に認められて、挿んである。

兄上の信仰よ、彼の敬虔なりしことよ。

午後から散歩に出掛けて、友達の家へ寄った。彼は畔上先生を恩師とする信徒である。彼の語学の力は驚くべきものがある。彼の読書力は実に旺盛である。彼の聖書研究は熱心であるらしい。彼の宗教詩研究も熱心である。カーライル、ブラウニング研究も尋常のものでない。彼は実に学者である。彼と語って、己れの智を紹介する様な態度の往々に見えるは遺憾である。彼は口数が多い。やや不遜なところがある。彼のために之を憂う。さらに彼のために憂う、その信仰を。

「汝は読書の人ならずや、汝は脳裡に宗教を了解せんとして生涯に之を実験せんとするや、果たして。汝の脳と口とは重くして、手と足とは軽きに非ずや。基督教は事実の宗教にして、智解すべきものに非ざるなり、実得すべきものなり。基督教は手を描き、机に凭り、書に頼り、沈黙考して案出し得べき者に非ず、是れ身に行い、其の為に窘められて始めて曉るを得るものなり。正直なる労働に由らずして基督教の真髓を知る能わず。すべての空想、すべての不遜、すべての僭妄、懶惰、智的傲慢を擲つにあらざれば、基督を其の謙遜と柔和と勤勉と率直との美に於て仰ぎ瞻ること能わざるなり。」——感想十年より——

と彼に忠告したのである。そしてまた、自分のためにも忠告したのである。

聖書研究、文学研究、まことに可なり。汝はこれに甚だ勤勉なるものなり。然れども汝の智的傲慢を如何せん。汝にも宗教書を読むときに、「之ぞ我が声なり」と思ひしことあらん。それが読書の貴きところにして、書により智を得るは第二のことなり。

汝、己れにたよることなかれ。飽くまでも謙遜、敬虔にして彼に頼りまつれよ。汝の研究、誠によし。汝の学者たらしめること誠によし。ただ願う、ただ祈る。汝の神の声を聞く人とならんことを。

今日もまた聖なる安息日を送らせ戴き感謝であつた。一日は、聖書と宗教書と書翰と日



記と散歩と天然であった。

○1923年5月28日(月)

晴、夜、雨。ローマ書第14章23節、

「疑者もし食わば罪に定めらる是信仰に由て食わざればなり。

すべて信仰に由てせざるものは罪なり。」(ロマ14・23)〔英文〕

今日の私には誠に有難き言である。なまぬるき基督者ならず、かたき基督者とならん。ただこれのみに生きる。すべては信仰によりて。

○1923年5月29日(火)

晴。○○○○氏の聖書講演が○○○にてあるから聴きに行つてはどうか、と勧められる人が居る。私は答えた、「有り難う、しかし、僕は……………」と、それだけ。「僕は」の後には言い難きの心が自分にあつた。その説明を下さないでよかつたとやはり思った。親しき友ですら、僕を知らないで、かく言ってくれる。僕の信仰は未だ未だか。僕はどこまでも己れの信ずるに従つて。

今日は我が(文乙)対理乙の蹴球戦があつた。前半戦に於てもろくも1点を先取せられた。力戦之を努めたのであつたが遂に及ばず、1対0で我が軍は敗れた。残念至極であつた。敵のF.C (football club) の奮闘は天晴れであつた。実力に於てやや劣つていたが勝てない戦ではなかつたが。我が軍の敗因は練習不足がその主たるものである。しかし選手の一員たる自分、負けて文句はない。ただ涙と赦罪しやぎのみであつた。

今夜は14日、実に名月夜、外出せずには居れず、戦闘の疲れも忘れて散歩に行つた。静けき淨き自然に抱かれて自分の心は慰められ、昼の闘いもいつしか忘れて、自分は自然の寵児に帰り、静けき中に神を求めた。雄々しく戦わしめ、雄々しく泣かしめ、而して暖かき愛を以て慰め給ひし神よ。この故に今日は敗けてまた幸なりき、神よ。何れの日も我、求むれば導き給う神は、今日もまた感謝の神なりき。

○1923年5月30日(水)

晴、満月。今日もよく運動した。母上を思うこと切である。今度の休みには帰つてお話したい。ルーテルの傍に長い間咲いてくれた董の花〔董の押花貼付あり〕。

ちとせのいわよ わがみをかこめ

さかれしわきの ちしおとみずに

つみもけがれも あらいきよめよ。

「なさけ慈とほどこし施濟とを忘るる勿れ、其はかかる祭斎まつりを以てこそ神の御心に適えばなり」(ヘブライ13・16)



「我等互いに相愛すべきは汝らが始より聞きし音信なり」(ヨハネ一3・11)
「²¹汝らは之がために召されたり、キリストも汝らの爲に苦難をうけ、汝ら
其の足跡に随はしめんとて模範を遺し給へるなり。」(ペテロ2・21)〔英文〕
……〔英文省略〕……
エス様は明瞭かに我々の道を示して下さったのである。

○1923年5月31日(木)

雨。The last day of Spring. 母上、兄上、義之君からの3通の手紙が机上に載っていた。学校から帰って来たときに。皆、よきしらせであった。母上様は、僕の帰宅するのを待って居られる。僕も母上様のためには本当に一刻も早くおそばに行って上げたい。

恩師尾田先生が今度洋行される。本当に先生のために万歳！を叫ぶ。勤勉なる先生！人格者なる先生！僕の敬愛する先生！万歳である。先生の御健康を祈って歓び送ろう。6月9日の午前に東京駅を出発されるとの由。8日には帰ろう。

今日は水風呂に入って(寮の湯末だわかぬとき)泳いだ。毎朝の冷水摩擦、去年の9月22日から。兄が鍛えて下さると思えば止められない。抵抗力のある頑強な身体に。真に主のためにお役に立つ身体に。これがためにのみ、我が身体は強健にならねばならない。

春は今日を以て去る。明日からは1923年の夏に入る。短かかりし1923年の春！しかし汝は誠によき春なりき。春よ！汝の暖かき日に育てられて、我も暖かくなれり。感謝す。

「^{しずか}肅に治まる心にぞ、命の真義は示されるれ。おぼろげながら、我は今信す。神の相は善の愛なり。救わる可き道はただ一つ。我をすする事なりと。」——ワイティア——

